理科の好き嫌い・学習動機づけについての要因モデルの検討

—授業場面・遊び経験・科学や科学者へのあこがれに注目した研究—

要　　約

本研究では、理科離れを理科への関心と学習意欲の低下ととらえ、その要因の構造を明らかにするために調査を行った。調査を行うにあたって、理科の好き嫌いや学習動機づけの要因については、従来研究されてきた授業場面に加え、遊びや科学・科学者へのあこがれにも注目して仮説モデルを作成した。仮説モデルは、遊びや科学・科学者へのあこがれが理科の授業の楽しさに影響し、授業の楽しさが理科の好き嫌いや学習動機づけに影響するというものであった。また、理科の好き嫌いの先行研究で学年差・性差が多く指摘されていることから、各尺度の学年差・性差にも注目した。

調査対象は小学校3年生～6年生と大学生で、質問紙によるアンケート調査が行われた。小学生調査の結果、仮説モデルは支持され、従来の授業場面の要因が理科の好き嫌いや学習動機づけに影響を与えるが、それを支える要因として遊びや科学・科学者へのあこがれの重要性が示された。学年差・性差については、特に学年差が強くあらわれ、高学年において、理科への関心と学習意欲の低下をいかにとどめるかが重要となることも分かった。大学生と小学生の比較をすると、多くの尺度で大学生の得点の低さがみられたため、小学校卒業後、理科への関心や学習意欲はさらに低下すると予測できる。